

セミナー R. S. I., 21, Janvier 1975

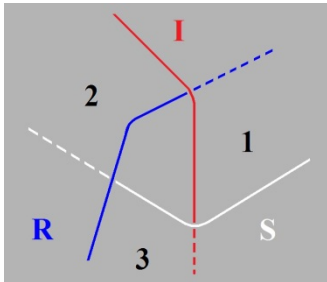
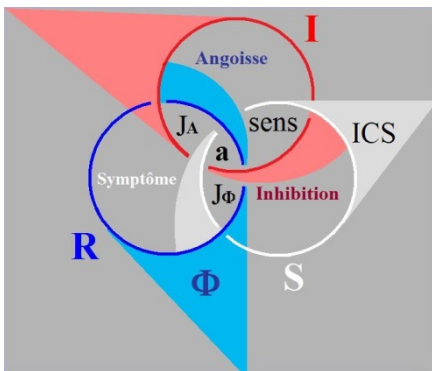
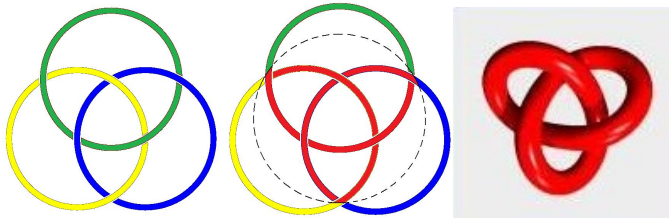


Fig. IV-1 (http://ecole-lacanianne.net/wp-content/uploads/2016/04/seminaire_seminario_transcription_ALI_1974_1978.pdf p. 57)に準じるならば、この Staferla の図は間違っているしそもそも判りにくい。1がR、2がS、3がIに対応するはずであり、ラカンの言葉からしてもその通りである。Afi 版 (Association Freudienne Internationale は 1982 年にシャルル・メルマンにより創設されたが 1987 年 Association Lacanienne Internationale と改名された) の図の各平面の縁取りがやや太い線で描かれているが、これ等の両端を結んで円形にし、R の太線が S の太線の上を通り、S の太線が I の太線の上を通り、I の太線が R の太線の上を通るようにすれば、この部分だけでポロメオの輪ができあがる。各面を変形することにより同じく Afi 版の Fig. IV-2 (Staferla の 2 番目の図) はできあがる。



意味 le sens は R の輪と帯の外縁に位置し、つまり R 内においては、既に述べた通り、意味はなく、non-sens あるいは hors-sens でしかなく、R の外に、つまり外-立 ex-siste して初めて意味は生じてくる(この解釈に小生は自信がない。寧ろ ex-sister することにより、意味は意味がなくなるようにも感じられる。semblant の考察が必要になってくる。何れにしても、意味は「うまく-言う」

bien-dire【「正しく-言う」ではなく】ことと解釈により与えられるものである)。象徴的なもの、想像的なものについても意味はここから生じてくる。Le sens はむしろ、想像的な領野において、後述する、effet de sens として Gestalt, bonne forme と結びつく。



ボロメオの輪から三つ葉結び目をつくるには図の左から右への操作。中央の点線で描かれた内部の赤い紐だけを取り出すだけでよい。前段の un nœud au 2nd degré とはボロメオの輪はそもそも結び目ではないので「文字通りにではない」が、構造としては三つ葉の結び目を見ることができる、という意味であろう。

4 次元空間においては結び目が解消されることについては、YouTube, <https://www.youtube.com/watch?v=mYSMM3hw-yk> 参照のこと

4 次元空間内への曲面結び目については、https://www.jstage.jst.go.jp/article/emath1996/1998/Autumn-Meeting1/1998_Autumn-Meeting1_85/_pdf 参照のこと。

ラカンはこの日、曲面を用いてボロメオの輪を提示しており「… 4次元空間とされているものにおいては、線の consistances ではなく、曲面が結び目をつくる」と言っているが、図はあくまで3次元上のものが示されているのであり、4次元空間とはなっていない(但し、Afi 版の R, S, I それぞれの帯を円環に閉じると仮定すると【Staferlaのp. 25の2番目の図、Afi版ではp. 58のFig. IV-2、は R, S, I それぞれの帯の縁の部分で青、黒、赤の濃い色となっている太線の部分のみを円環で閉じたものである】、これは 3 次元上で表すことができないが、はめ込み immersion により、つまり 4次元空間において可能となる)。

「太紐 corde(ラカンは【ボロメオの】輪を作るに際し、細紐 ficelle でと言っ

たり、さらにトーラスを用いて【ボロメオの】と言ったりするが、トーラスの場合は中空の構造があり、後日これが問題となってくる)は症状となり、これが象徴的なものを *consiste* している」、と言っているが、象徴的なものも *consistance* の特性をもつこととなるのである。このことは本セミナーの 4 月 15 日の講義において四つ目の輪、*le Nom-du-Père* さらにその他の *noms du père* との関連で、ボロメオの輪の構造に即して説明されているし、このテーマは *Le sinthome* にも連なっている。いずれにしても症状というものが重層的に絡んでくる。

Montrer la corde といった表現は「最後の切り札を対戦相手に見せてしまう」を意味する。*la corde* は第一義的には綱、太紐であるが、磨耗した織糸の意もある。*la corde* で編まれた生地を、例えば各方向に引っ張ったりしてぞんざいに扱えば、網目が透けて見えるようになり (*tissage* とは策略をも意味する。*tisser des intrigues* とは文字通り「策略を練る」ことである)、繊維も磨耗する。こうなれば、手の内はみえみえになってしまう(どれもボロメオの輪に過ぎないことが解ってしまう)。*étoffe* とは *tissu* と同義であるが、*avoir l' étoffe de qc* で「なにになになる資質がある」という表現からもより高級な *tissu* と考えてよい。油断すれば高級織物も解れ糸だらけのぼろ切れになる。*Staferla* における図も *Afi* 版の図も、ラカンが予め紙に描いて聴講者に見せたのであろうが、これ以外の図もあったのかもしれない (*hexagonal, ces six autres ronds, six fois trois - dix-huit autres ronds* とはなにを指しているのか不明である)。最後は黒板に描くことはできたであろうが、図で埋め尽くされてしまうであろうから、と自慢話となっている。

ここで、先ほど述べられた、症状と象徴的なものとの関係についてラカンは繰り返し「症状ということばから始めたのは、象徴的なものが *consistance* から最も単純なメタフォールをつくるからなのです」と言っているが、この行について。メルマンの説明を引用しよう。

象徴的なものが、定義上、一種の連鎖によって構成されているということによって理解されましようと言っていますが。これについては、「盗まれた手紙についてのセミナー」において、ラ

カンがマルコフ連鎖をどのように用いているかは存じでのことと思います。このことはおそらく、象徴的なものをつき進めると、この特別な consistence のアイデアに通ずるということなのでしょう。そしてこの consistence が無意識と関係をもつこととなるのでしょう。

ラカンはこう続けている

円環的なかたちが第一のかたち(おそらく 3 次元上では球形で、2 次元上では円形を指しているのであろう)ではないのです。よいかたち *bonne forme*(ゲシュタルト心理学でいうところの *Prägnanz* :小生)の概念もここから来ているのです。そしてこのよいかたちの概念からすると、言うならば、現実的なものにまで想像的なものに属するものが入り込んでいるということなのです。

(小生コメント)ということは、円環的なかたちも「歪んだ真珠」なのであろうか。たしかに *Prägnanz* については、最新の脳科学でも、小生の知る限り、あまり解明されていないようである。機知も含めて無意識に関わる問題についても-事実ラカンは、無意識は仮説として想定されるものと言っている-科学的には反証は未だなされていないと言える。

Afi 版の図、Fig. VI-6 (p. 100) を先取りして見れば一目瞭然ではある。無意識が S の輪の右側に拮がっているのを consistence として繋ぎ止めているのは R の輪のなかに同様に墨色で示されている症状である。

さらに 4 月 15 日の講義のラカンの説明でさらに理解は深まるが、同日の講義の小生の解題で繋げたい。

ついでラカンはよい形と意味 *sens* は類縁関係にあるとしているが、このことについての説明はなく、直ちに身体について、さらに(対象)a へと話題が移ってしまう(1974 年 12 月 17 日の「第三の指摘」の拙訳の部分を読み直していただきたい。ラカンはこう言っていた、「ジュイッサンスはこの想像的まとも *consistence imaginaire* に関しては *ex-sister* するしかない。あるいはこのことを文字で言えばこうなります。現実界に関しては、ジュイッサンスにおいて

は別の意味【下線：小生】が現れてくる」と)。

視覚は眼球と同様、その知覚は球形である。聴覚は蝸牛管が渦巻状の形状であるにもかかわらずやはり球形である。(対象)a も球形と看做され(神話的にはそう看做される、という意味である)、これは身体における孔穴が円形であるからだとされる(前述したように球形、それを二次元上に投射した円形が「よいかたち」であるのだが、この「よいかたち」に人間は惑わされているのである。そこには功罪がある。ラカンあまり「功」の部分は語らない。「罪」に関しては、枚挙に暇はない)。

a なしに調和を謳っていないあらゆる理論(ラカンの理論がまさに調和とは相容れない理論である：小生)を展開しても、なにかが欠けてきます。事実はこちらからです。すなわち、主体は、主体と想定されたものであり、想定されたものという条件でのみ規定できるのですが、この主体は、主体として、自らはある対象によって存在理由があることだけからしてなにかを知ることができるのです。ところが主体はこの対象を知りませんし露ほども知ろうとしないのです。a が<他者>ではないからです。<他者>とは知 *connaissance* の<他者>ですが、対象、対象 a といえ、この<他者>を抹消してしまうのです。

ここで a がテーマに上ったのは黄金数についての話しに繋げるためである。

<他者>へのアプローチとしてふたつの入り口があり、ひとつは a であり、もうひとつはシニフィアンの<一>である。1 と a を用いた式として黄金律の式がある： $1/a=1+a$ 。黄金比についてはセミナー 14 卷「幻想の論理」と 16 卷「<他者>から他者へ」でいろいろな角度から取り上げられてきた。黄金比 (<https://ja.wikipedia.org/wiki/黄金比> 参照のこと)は自然界において、また建築、絵画の分野においても古代から理想的な比率と看做されてきた。幻想との関係でみると、「よい形」に結びつくものである。当然ながら性行為における満足(理想的な対比による結合)に話が及ぶのであるが、ラカンはセミナー「幻想の論理」1967年4月12日のセミナーにおいて、性行為をブールの論理

積にあたるものとしてファロスの(想像的)機能-これを b として-を有するものと有しないものとの積、つまり $(a+b)(a-b)$ として示すことができるが、「性的関係は存在しない」といったテーゼを先取りするかのようになり、このファロスの想像的機能は、同時期の発表となる「主体の転覆と欲望の弁証法」(Écrits, p. 819)におけるのと同様、 $\sqrt{-1}$ つまり虚数 i で示すこともでき、 $(1+i)(1-i)=2$ により、男性と女性は合一により $\langle - \rangle$ には至らず、それぞれである 2 が残ることを証明している。黄金比においては $(1+a)(1-a)=a$ から(この場合の a はラカンの a である)、 $1+a=1/a$; $1-a=a^2$; $(1+a)(1-a)=(1/a)a^2=a$ が導き出される。この日のセミナー(1975年1月21日)においては、図で示されるように、1 に対して a が黄金比として示されるが、 a に対しては a^2 が、さらに a^2 に対しては $a^3 \dots$ と際限なく続くこととなり、黄金比 $1 : a = 1 : 1 + \sqrt{5}/2$ であり、1 と a とは結局のところ通約不可能であることが明らかになる。

ここでラカンは意味の $\langle - \rangle$ l' Un de sens とシニフィアンの $\langle - \rangle$ l' Un de signifiant というものを対峙させる。

意味の $\langle - \rangle$ とシニフィアンによってもたらされる $\langle - \rangle$ とを混同してはなりません。意味の $\langle - \rangle$ とは存在のことです、存在なのですが無意識に特化した存在であり、外-立 *ex-siste* するものとしての存在であり、少なくとも身体に外-立します。外-立するとあまりに不調和なのでよく判ります。無意識というものは、わたしがみなさんにお話している通りに出来ているのだとすると、身体に対して調和をもたらすものなど皆無なのです。つまり無意識は不調和なものなのです。無意識は、主体が語ることにより存在するものとしての主体を規定しますが、 \langle わたし \rangle がメトニミックに欲望を支えていることから、このメトニミーからは主体は存在することを抹消されてしまいます。ですから \langle わたし \rangle は存在する \langle わたし \rangle などとはどうあっても言えなくなるのです。わたしが小文字の a は欲望の原因だと言うとき、 a は欲望の原因となる対象とはなりません。 a は欲望の直接補語でも間接補語でもなく、単にその原因であるだけであり、最初のローマ講演でも言いましたが、駄洒落として、この原因はいつもお喋りばかりしている *cette cause qui cause toujours* となり

ます。主体はある対象が原因となっているのですが、このある対象は文字で表記するしかないのです。このことから理論のうえで一步前進なのです。というのも、言語の効果とは受難を受ける $\pi\alpha\theta\varepsilon\iota\nu$ ことであり、身体を受難なのです。言語は記載され表記され得るものですが、言語そのものに効果はなく、この言語の捨象の最たるものが対象なのです。対象をわたしはエクリチュールの形象により a で書き示しますが、そこからはなにも考えが浮かびません。但し、例外として、主体は、思考の主体は<存在>であるといったイメージが浮かんで来ますが、この a がそうさせるのです。意味の<一>は a に関してはほとんど関わってこないで、効果としての意味の<一>、シニフィアンの効果としてであり、周知のことですが、シニフィアンの効果については強調いたしたい。シニフィアンの<一>が働くのは、実際は、なんらかのシニフィエを指示するのに用いられることが許されているという条件つきなのです。想像的なものと現実的なものはこの a のところでシニフィアンの<一>に結びつけられます。こうとしか言いようがないでしょう。つまりこの二つの領野の質-チャールズ・サンダース・パースが firstness 注) と呼んだものです-についてですが、この二つの領野を異なった質として割り振るのです。例えば、これらの領野に「生」と「死」をどう割り振りするかです。注) Charles Sanders Peirce, 14/5/1867 “On a New list of Categories” v. Categories : https://fr.wikipedia.org/wiki/Charles_Sanders_Peirce

以下ここから Peirce のカテゴリー表をコピーし貼り付けた。

Peirce's categories (technical name: the cenopythagorean categories) ^[106]					
Name:	Typical characterization:	As universe of experience:	As quantity:	Technical definition:	Valence, "adicity":

Firstness. ^[107]	Quality of feeling.	Ideas, chance, possibility.	Vagueness, "some".	Reference to a ground (a ground is a pure abstraction of a quality). ^[108]	Essentially monadic (the quale, in the sense of the <i>such</i> , ^[109] which has the quality).
Secondness. ^[110]	Reaction, resistance, (dyadic) relation.	Brute facts, actuality.	Singularity, discreteness, "this".	Reference to a correlate (by its relate).	Essentially dyadic (the relate and the correlate).
Thirdness. ^[111]	Representation, mediation.	Habits, laws, necessity.	Generality, continuity, "all".	Reference to an interpretant*.	Essentially triadic (sign, object, interpretant*).

*Note: An interpretant is an interpretation (human or otherwise) in the sense of the product of an interpretive process.

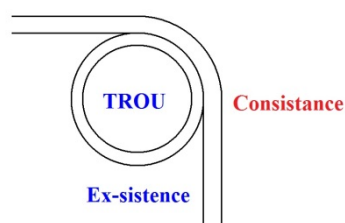
さらに http://www.academia.edu/10816288/チャールズ_S_パース_新しいカテゴリー表について_邦訳を参照されたい。

意味の〈一〉とはメルマンの言うとおりの初出である。シニフィアンの〈一〉は一本の線 *le trait unaire* であり、《1》の連続である。無意識には《1》が溢れている。無意識は数学的方法により規則的に並んでいるのであり数により編まれているのではないだろうか(といっても《1》のみであり、自然数、整数とは関係ない。自然数、整数といった数そのものが *débilité mentale* の所産なのではと小生は疑っている)、とメルマンは述べている。これに対して意味の〈一〉は名指しと関係している(この点については後日の講義で明らかになる)。メルマンは

対象 a を例にとっている。対象 a はエクリチュールにおいて示されているものであり。それ自体は無意味なものである。かれ(メルマン)がこの対象 a を最高善と規定すると、それを追い求め、しかし幻滅する。最高善となればパラダイスだからである。シニフィアンの〈一〉であれば、パラダイスはやや暑いかもしれないので問題は残る、とメルマンも陳腐な冗談を言う。意味の〈一〉は象徴的なものと想像的なものの輪の交差部分にあり ex-siste してきて、つまるところ semblant として働く (Charles Melman, *Étude critique du séminaire RSI de Jacques Lacan*, Édition Association Lacanienne Internationale, pp. 77-78)。

想像的なものに属するのが死すべきものであり、現実的なものに属するのが生けるものとすれば間違いとなるだろうが、シニフィアンの用法は恣意的であり、このような間違いも正当化されてしまう、とは屁理屈に過ぎない。構造化されたディスクール un discours structuré(「良識的なディスクール」ぐらいの意味か)かではこのような恣意性は生まれない。

屁理屈は ornicar ?についてまで及ぶ。周知のように École Freudienne de Paris さらに École de la Cause Freudienne の機関紙といってよい雑誌のタイトルであり、接続名 or, ni, car で始まる節は主語と述部を倒置させなくてもよいことになっているが、これは慣用であり、ラカン曰く非文法的であると。イカロスは自身の翼に対する矜持から太陽に向かって飛び立つが、太陽に近づき過ぎてその翼を焼かれ「落／墮ちる」。ICAR を「飾って」orner やれば、Ornicar になる。言語は文彩、さらには修辞でしかない。メタフォールについての自己批判、自己諧謔の結果なのであろう。



再度 Afi 版の冒頭の図 Fig. IV-1 のどこかの面の縁に縁取りをつけこれを円環状に閉じれば当然そのなかは穴となり穴から出て行くものは ex-sistence となり、同様に縁取りによって固定すれば consistance といえる (Afi 版では、この箇所

に図はなく、同様な図は p. 83 の Fig. V-3【1975年2月11日の講義】、これと関連する図が p. 100 の Fig. VI-6【1975年2月18日の講義】に認められるので、こちらも参照されたい。この Fig. VI-6 では、右側の墨色の部分に対して矢印が引かれ、「無意識はここにあり・・・」と書かれており、左側の部分の右外縁に対しては「紐の円環による consistance・・・領野の内側・・・」、左外縁は「現実的なもののなかに現れるもので・・・」と書かれている。

Staferla での説明に戻ると、前述した〈他者〉へのふたつの入り口である小文字の a とシニフィアンが交差すること-これが存在するものと定義されている-によってできる編み目から情動が ex-sister する、とラカンは言っている(小生コメント：ここでは affect とは情動でもあるだろうが、affecté「患っている」とも関係していると読める。なぜ affecté かというと、対象 a の損失により身体は affecté しているのであり【繰り返し言うが、対象 a などそもそも存在しない。非-在としての a により、シニフィアンは一本の線として身体に切創を刻むのだが、この結果できた身体各部の欠損を埋め合わせる対象など存在しないのだから、傷痕のみ残るのである】、lalangue の身体への寄生、存在のジュイッサンスとしての ex-sistence と後期ラカンの理論が集約されているような行である。端的に言って、l' affect d' ex-sister とはジュイッサンスの ex-sistence とほぼ同義ではないだろうか)。このことが症状が支えられる (consistance と置き換えてもよからう) のと同期していると。

ここから症状の問題へと話しが引き継がれてゆく。

症状とはなにか、と問いを發し、それは症状の関数 fonction の問題だと直ちに答えが導かれ、 $f(x)$ で示される。x とは、文字で表される無意識に関わる問題であり、 $f(x)$ とはすべての文字とのあいだに一对一の対応が成り立つことであるとされる。しかしながら無意識からはどの文字も 1 と書かれる。このことで症状とは容赦なく sauvagement「書かれることを止めない」ものとなる。

ラカンのところで分析を行っているある分析主体が症状について語っていて、中断符に近い状態になってしまったと。「止めない」のであるから限がないのであり、例えばフランス語では etc., etc. とするしかないからである。

ついでマルクスが社会のなかにおける症状と規定した症状であるが、社会のなかとはいえ、各個人それぞれの症状となる。社会のなかにおける症状は非-理性と定義されるが、個人のレヴェルにおいてはあらゆる合理性が際立っている。

症状とマルクスの関係については1975年2月18日の講義で再び取り上げられるので、ここではこれぐらいにしておく。

ついで父親の問題へと話に移る。Un père n' a droit au respect, sinon à l' amour, que si le dit, le dit amour, le dit respect, est - vous n' allez pas en croire vos oreilles -père-versement orienté, c' est-à-dire fait d' une femme, *objet (a)* qui cause son désir. とラカンは言っているのであるが、Un père n' a droit au respect, sinon à l' amourまでは「(現実の)父親un pèreは愛が認められる場合にのみ尊敬も認められる」と訳せるが、その後で「愛と言われているもの」そして「尊敬と言われているもの」について、「皆さんは耳を疑うでしょう」と断った上で、「père-versementの方向に導かれている」となる。père-versementとはpère-versionという名詞を副詞にしたものであるが、この行そしてこれに続く部分がそのままpère-versionの定義ともなっている。c' est-à-dire d' une femme, objet (a) qui cause son désirつまり、父親は母親を欲望の対象として、となっているのであるから、これが愛と言えるかどうかである。対象はすべて部分対象である。女体の部分に対する欲望、これは端的に言って「やりたい！」と思う欲望である。各国語においていわゆる愛の標準的表現は異なる。スペイン語ではTe quieroが標準的であり(であるから女性の側もこれに応えるか拒絶するかで非常にシンプルで、「愛なんて簡単なことでしょう」というギャランズの台詞【天井桟敷の人々】そのままである。米国におけるヒスパニック系の出生率が突出しているのもここから説明できるのでは。)、これをフランス語に直訳すればJe te desireだがあまり使われない表現であり(あまりにも直截的だからか)、je te veuxの方がしばしば聞かれる。これは英語のI want youに近いのではないだろうか。スペイン語に戻るとTe amoなどは日常男女間で使われることとしては稀であり、それこそ糟糠之妻(この表現もいまやカビが生えたようなものとなってしまっているが)に対して夫が例外的に口にするらしい。他のヨーロッパ諸言語においても、Ich liebe dich(ベートーヴェンのリートでは有名【Karl Friedrich Wilhelm Herroseの詩による。タイトルはZärtliche Liebe】であるが)、ロシア語Я т е б я л ю б л юにしても、男性が女性に対してこれを口にしても「なにそれっ」と言うような反応が帰ってくる場合が多く、おいそれと使って良い表現ではないのだ。性愛と生殖との間には懸隔がある。生殖に結びつく性愛のみのカップルつまり性交coitus以外の行為をしないカップルがいたら、かれらの関係は倒錯的でないといえるが、ほとんどのケースで性愛は倒錯的である。coitusにしても、

純粹に生殖行為(つまり人類という種の再生産に寄与しようとする行為)が目的で-つまり本能に忠実な行為となる-faire l' amour, make loveをするなどという御仁は特別天然記念物である。リビドーの発達段階なる馬鹿げた理論があるにせよ、成人に達してもほとんどのlove affaireは倒錯的である。一方、仮に… ou pireでの愛の要求の定式Je te demande de me refuser ce que je t' offre, parce que ça n' est pas ça「僕が君に与えるものを拒んで欲しい、なぜならばそれはそうではないのだから」により性愛の性と愛を一旦切り離れた上ならば愛のある性を主張できるとして、後述するla croireとy croireの違いとも結びつくが、単に「やりたい！」を自分は恋愛に陥っていると思う(これは圧倒的に男子に多い)ことは妄想の域にも達していると言える。「愛は屋上の鳥に及ぶ」とは言うものの、原動力は欲望であり、しばしばこれが美化されるのである。ともあれ、(欲望に過ぎないものをしづしづでも妻に)愛と認めてもらい受入れられる(a)-cueilleことでpère-versionは家庭において父親が、別の対象(a)、母親にとっての対象(a)である子どもたちとも、例外的にうまくいっているケースでは、禁圧を加えながら介入できるし半分神様mi-Dieuのような存在を保つこともできる。父親の役割fonction(père-versionはその唯一の保証であると)これも症状の関数fonctionである。ファロスは欠陥を抱えており、「性的関係」がないのはこのファロスが「うまく行かない」からなのである。ファロスのジュイッサンスは<他者>のジュイッサンス(jouissance de l' Autreのこのde はこの場合、目的格的属詞であり、主体がそれこそカマキリの雌でもない限り、パートナーを捕食することとはならない。とりわけファロスにはそのような力量は欠けており)は不可能なのであるから、この不可能性、それは現実的なものに属するのであるが、ここから愛は生まれるのだから情けない話とは言える。 $\exists x \neg \Phi x$ は-により例外的な存在 \exists なのであるが、愛というお墨付きがかくも情けない話に支えられている。ラカンシュレーパーについて触れているが、本セミナーの4月8日の講義において、これと関連して、神としか性的関係は結ばれないことが述べられることとなる。さらにLe Sinthomeにおいてはジョイスにおけるsans nom「名無し」と固有名の問題に繋がって行く。père-versionからは、後期ラカンにおいては、父親の役割fonctionが子どもにとって象徴的なもの=父親のメタフォルよりより現実的なものへと重みがシフトしてくることが読み取れるし、父親の症状(ファロスがうまくいっていないこと/ファロスを振りかざしてもうまく行かないこと【パロールの論理の限界】)により、どのように子どもが、子ども自身の症状(2月18日の講義においての

症状のラカンによる定義を先取りして示すと、「症状とは各自が無意識をどう享ずるか jouit de l' inconscient で変わってくるが、そもそも無意識とはそう享ずることを各自に決定づけている」となるが)に同一化して行くのかといった問いが立てられる。また père-version はボロメオの輪においては、四つめの輪と結びつき、nomination との関係が重要になるが、その延長線上でボロメオの輪には一波乱がやってくることは別稿その2(Erik PorgeのL' erre de la métaphoreの要約)でみてきたとおりである。

ついで、ファロスについて、器官をもたないジュイッサンス、あるいはジュイッサンスをもたない器官ではないか、という問いが立てられるが、この答えは3月11日の講義まで待たなくてはならない。このファロスをもつ男性側からすると、女性とは何か qu' est-ce qu' une femme ? という問いには、それは症状であると直ちに答えが出てくる。ファロスのジュイッサンスは<他者>のジュイッサンスに対しては不能であるからこれを症状と呼べるわけである。症状とは中断符であることは既に述べられたが、これは langue pendante という表現からも、「パロールではお手上げ」ということであり、これはファリックな機能の機能不全が因にあるわけで、女性も同様であるとラカンは言っており、小生の説明がやや度を越していたきらいはある。Franz Kaltenbeck の SAVOIR ET CLINIQUE 誌所収の De la mère au symptôme と題された論文にも、この日の講義の引用があるが、母子関係について話を展開することが主旨なのであり(ここでは「父親のメタフォール」などという言葉は死語になっている)、母親の子への愛着の方が凄まじいのであって(男性は欲望→[ファロスのジュイッサンス]→愛なのだが女性【と言ってもあくまで母親の場合である】は欲望→母親のジュイッサンス^注→愛という図式を小生は提唱したい)。このことからしばしば悲劇的な母子関係に発展するケースがこの論文では取り上げられている。因みに「不安」のセミナーにおける<他者>の欲望はそれがもし実現されれば<他者>のジュイッサンスが成立してくるわけで、ラカンにおける「不安」はこの<他者>-とは言ってもこの<他者>は母親=女性としての<他者>である-のジュイッサンスに対する不安と言ってもよいであろう。また Éric Laurent は <https://www.lacan-universite.fr/wp-content/uploads/.../Travaux-Laurent-15.pdf> に La psychanalyse guérit-elle du transfert というタイトルで père-version について、さらに女性=母親の倒錯について書いている。

小生の説明とは相容れないと言えるかもしれないが、小生はあくまで男女のあいだのいわゆる恋愛に関してのみ述べたので、間違いではないと確信している。フェティッシュの問題はまた別の機会に書かねばならない。確かに男女間とはいってもこの「女」が「母親」で「男」がその子ども、といった図式で展開される男女関係もありうるが(男はその場合マゾシストを演じなければならない)。

注) セミネール XXVI *La topologie et le temps*, 1979年5月15日のセミネールではラカンは Juan-David Nasio と Jean-Michel Vappereau との対話に託して、かれ自身はまったく発言していないが、ここで Nasio の口からこの *la jouissance de la mère* ということばが発せられるが、Nasio は素朴で楽天的すぎる。

ジロドゥウーの『オンディーヌ』を例にとり、*y croire* と *la croire* の違いに話が及ぶ。よく言われることだが愛は狂気に等しいと、これは *la croire* の側にある。精神病においては、例えば、いわゆる幻聴と呼ばれる病的体験について、病者は声が発せられていることを信ずる *y croire*。但し彼らはこの声の内容まで信ずるのだが、これが *la croire* である。愛は独りよがりで、「火遊びは火傷のもと」と日本語でも言える。男と女のあいだの壁を無視して突進すると額に瘤をつくることになる、恋は盲目だから。スタンダールがいろいろな愛の類型を列挙しているが、*la croire* はいわゆる大恋愛 *l'amour majeur* なのであるからこれは喜劇である。*y croire* の場合は、相手は *une femme* であるので、*il y en a une* その他多勢のひとりなのだとして、一生の伴侶とすべきか否かはクエッションマークをつけるのが良識と言えるものである、となる。*la croire* となると、日本語では「一生に一度の」という感覚であろうか。*une* を *la* に置き換えてしまうのであるからこれはかなり狂っていると言えるが誰でも(小生思うに特に男子は)これをやってしまう(ラカンは *Une femme est une femme* であるといった失礼な表現は絶対用いない。これも良識に属す。小生思うにラカンは *un homme de bon sens* であったのではないか注)。症状なのだから中断符が必要であり、*une femme c'est un symptôme* と心得ていれば大火傷はしないで済む。

注) 一方で、2月11日の講義では(この講義の直前、ラカンはロンドンに赴き講

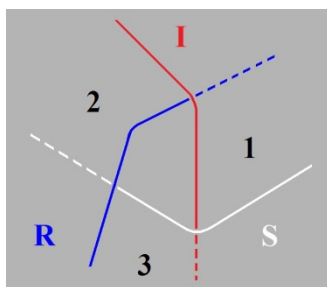
演を行っている【2月3日】、【<http://aejcpp.free.fr/lacan/1975-02-03.htm>】）
心境の変化であろうか、ヴィクトリア女王のことを *vigin denté* だと言っているが、これは言い過ぎではなかろうか。

21Janvier1975

[Table des séances](#)

Justement à cause – *on entend ou pas ?* – à cause de ce dont je vous parle : le nœud, je ne peux pas avoir, je ne peux pas m'assurer d'avoir un plan. Parce que le nœud, si vous le voyez comme je l'ai dessiné là, tout à droite, je vous expliquerai après, pourquoi il prend cette forme-là, disons de trois pages. Imaginons-les brochées, ficelées ici :

- voilà donc la première, qui est un morceau de page, ceci pour me faire comprendre, ça semble aller de soi,
- la seconde, c'est **S** qui est juste dessous,
- et vous voyez qu'ici la troisième qu'il vous est facile d'imaginer à partir de ce brochage à gauche, il est nécessaire que la 3^{ème} refile sur la 1^{ère}.

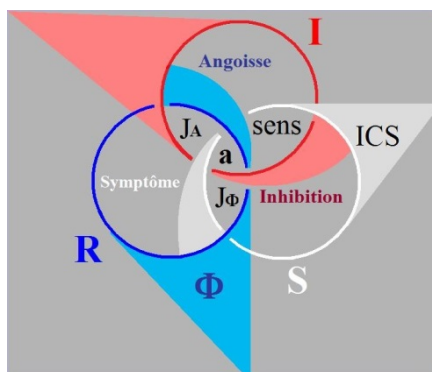


Néanmoins, il y a des endroits où à perforer les pages, vous n'en trouverez qu'une. Il y en a trois : ici, vous ne trouverez que la page 2, ici que la page 1, et ici que la page 3. Mais partout ailleurs vous trouverez les trois, ce qui m'empêche d'avoir *un plan*, puisqu'il y en a trois.

Il y a plusieurs modes d'énoncer *le sens*, qui tous se rapportent au *Réel* dont il répond. Pour

que vous ne vous embrouillez pas quand même, je vous marque que le *Réel* ici il se marque du bord d'un trou, l'*Imaginaire* ici, et là le *Symbolique* - ça c'est pour que vous suiviez - tous se rapportent - *ces sens* - au *Réel*, au *Réel* dont chacun répond.

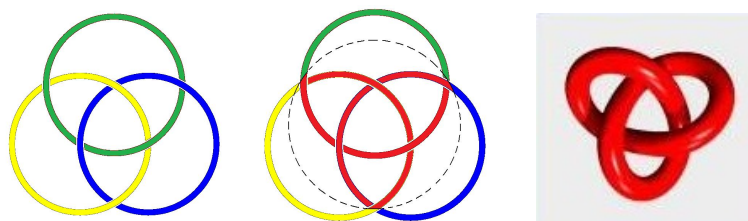
C'est là où se confirme la souplesse du nœud, qui fait aussi sa nécessité. Le principe du nœud, c'est qu'il ne se défait pas, sauf à ce qu'on le brise. Qu'est-ce que c'est que ce *dénouement du nœud*, qui est *impossible* ? C'est le retour à une forme dite triviale et qui est celle du rond de ficelle, justement ! De sorte que c'est un nœud, c'est un nœud au 2nd degré. *C'est un nœud qui tient*, comme vous l'avez déjà maintes fois entendu de ma voix, *c'est un nœud qui tient à ce qu'il y ait 3 ronds*.



Le vrai nœud, le nœud dont on s'occupe dans la théorie des nœuds, c'est ce qui...

comme vous le voyez là sur la figure que je viens d'ajouter

...est justement ce qui ne se transforme pas par une déformation continue en la figure triviale du rond. Si on parle d'un nœud fait avec trois figures triviales – à savoir trois ronds – c'est quelque chose qui se désigne ou plutôt se dessine de ceci : c'est qu'à couper de cette façon quelque chose qui est, si on peut dire, le nœud borroméen lui-même, vous obtiendrez en conjoignant ce que vous avez coupé, à chaque fois, vous obtiendrez la figure propre d'un nœud au sens propre du mot.



En quoi consiste la façon la plus commode de montrer *qu'un nœud est un nœud* ? Car ce nœud-là, celui de droite, est le nœud le plus simple qui existe. Vous l'obtenez à faire qu'à arrondir une corde et à la passer par exemple sur la droite du bout que vous tenez, c'est à faire rentrer la corde par la gauche à l'intérieur du rond qu'ainsi vous avez formé, que vous voyez se faire ce qui sur une corde s'appelle un nœud, un nœud que vous pouvez dénouer, mais qui ne se dénoue plus à partir de quand ?

À partir du moment où vous supposez que les deux bouts de la corde se rejoignent par une épaisseur ou bien que vous supposez que cette corde n'a pas de fin, s'étend jusqu'aux limites pensables ou plus exactement dépasse même ces limites. Auquel cas, vous aurez affaire à proprement parler au nœud le plus simple, ce nœud qui quand vous le fermez, a la forme que vous voyez là à droite, c'est-à-dire est ce qu'on appelle un nœud-trèfle, « *clove hitch* » en anglais.

Il est trèfle en ceci qu'il est trois. Il dessine - mis à plat - il permet de dessiner, non pas trois champs, mais quatre champs. Ce sont ces champs que vous retrouvez dans la forme du *nœud borroméen*, celle qui n'est faite que de ceci : que l'un de chaque figure que j'ai appelée triviale, rond de ficelle, l'un de chacune de ces figures fait - des deux autres - nœud, c'est-à-dire que c'est d'être trois qu'il y a un lien, un lien de nœud qui se constitue pour les deux autres.

Si vous entendez parler quelquefois d'un monde à quatre dimensions, vous saurez que dans ce monde - calculable mais pas imaginable - il ne saurait y avoir de *tels nœuds* : impossible d'y nouer une corde - si tant est que ce monde existe - impossible d'y nouer une corde en raison de ceci : que toute figure, quelle qu'elle soit, se supporte non pas d'une ligne mais d'une *consistance* de corde, que toute figure de cette espèce est déformable dans n'importe quelle autre.

Néanmoins, si la chose vous était imaginable, il vous serait possible d'entendre, de savoir par oui-dire parce qu'aussi bien la démonstration n'en est pas simple mais qu'elle est faisable, c'est que dans un espace supposé être à quatre dimensions, ce sont non pas des *consistances* de lignes mais des surfaces qui peuvent faire nœud.

C'est-à-dire qu'il subsiste dans l'ordre indéfini, des dimensions supposables comme étant en nombre supérieur au 3 dont se constitue - c'est bien là qu'il faut que je m'arrête - dont se constitue assurément *notre « monde »*, c'est-à-dire *notre représentation*. Au moment où je dis « *monde* », n'aurais-je pas dû dire notre *réel*, à cette seule condition, qu'on s'aperçoive que le « *monde* », ici comme *représentation*, dépend de la jonction de ces trois *consistances* que je dénomme du *Symbolique*, de l'*Imaginaire* et du *Réel*, les *consistances* d'ailleurs leur étant supposées.

Mais qu'il s'agisse de *trois consistances* et que ce soit d'elles que dépend toute *représentation*, est là quelque chose de bien fait pour nous suggérer qu'il y a plus dans l'expérience qui nécessite cette, je dirais *trivision*, *cette division en trois de consistances diverses*. Que c'est de là, sans que nous puissions en trancher, qu'est *supposable* que la conséquence soit notre *représentation* de l'espace tel qu'il est, soit à trois dimensions.

La question qui s'évoque à ce temps de mon énoncé, c'est ceci qui répond à la notion de *consistance* : qu'est-ce que peut être *supposer* - *puisque le terme de consistance suppose celui de démonstration* - qu'est-ce que peut être *supposer une démonstration dans le Réel*? Rien d'autre ne le suppose que la consistance dont la corde est ici le support. La corde ici est, si je puis dire, le fondement de l'accord. Pour faire un saut dans ce qui, de ce que j'énonce, ne se produira qu'un peu plus tard, je dirai que la corde devient ainsi le *symptôme* de ce en quoi le *Symbolique* consiste.

Ce qui ne va pas mal après tout avec ceci dont nous témoigne le langage que la formule « *montrer la corde* » - en quoi se désigne *l'usure du tissage* - a sa portée, puisqu'en fin de compte « *montrer la corde* » c'est dire que le tissage ne se camoufle plus...

en ceci dont l'usage métaphorique est aussi permanent

...ne se camoufle plus dans ce qu'on appelle - avec l'idée qu'en disant ça, on dit quelque chose - dans ce qu'on appelle *l'étoffe*. L' *étoffe* de quelque chose est ce qui pour un rien ferait image de *substance*, et ce qui d'ailleurs est usuel dans l'emploi. Il s'agit dans cette formule « *montrer la corde* » dont je parlais, de s'apercevoir *qu'il n'y a d'étoffe qui ne soit tissage*.

J'avais préparé pour vous sur un papier - parce que c'est trop compliqué à dessiner au

tableau - fait tout un tissage, uniquement fait de *nœuds borroméens*. On peut en couvrir la surface du tableau noir. Il est facile de s'apercevoir qu'on arrive à un tissu, si je puis dire, hexagonal. Croyez pas que là, pourtant, que la section d'un quelconque des ronds de tissage – appelons-les là comme ça – libérera quoi que ce soit de ce à quoi il est noué, puisque, à n'en couper qu'un seul, ils sont, ces six autres ronds libérés d'une coupure, retenus ailleurs, retenus par les - six fois trois - dix-huit autres ronds avec lesquels il est noué de façon borroméenne.

Si j'ai tout à l'heure sorti prématurément - mais faut bien ! C'est même la loi du langage que quelque chose sorte avant d'être commentable - *si j'ai sorti le terme de symptôme, c'est bien parce que le Symbolique est ce qui de la consistance fait métaphore la plus simple.*

Non pas que la figure circulaire ne soit *premièrement* une figure, c'est-à-dire *imaginable*. C'est même là qu'on a fondé la notion de *la bonne forme*. Et cette notion de *la bonne forme*, c'est bien ce qui est fait pour nous faire, si je puis dire, rentrer dans le *Réel* ce qu'il en est de *l'Imaginaire*.

Et je dirais plus : il y a parenté de *la bonne forme* avec le sens, ce qui est à remarquer.

L'ordre du sens se configure, si l'on peut dire, naturellement de ce que cette forme du cercle désigne. La consistance supposée au *Symbolique* se fait accord de cette image en quelque sorte primaire dont en somme il a fallu attendre la psychanalyse pour qu'on s'aperçoive qu'elle est liée à l'ordre de ce corps à quoi est suspendu *l'Imaginaire*. Car qui doute - c'est même sur ce mince fil qu'a vécu tout ce qu'on appelle philosophie jusqu'à ce jour - qui doute qu'il y ait un autre ordre que celui où le corps croit se déplacer ? Mais cet *ordre du corps* ne s'en explique pas plus pour autant.

Pourquoi l'œil *voit-il* « *sphérique* » alors qu'il est incontestablement perçu comme sphère, tandis que l'oreille – remarquez-le – *entend* « *sphère* » tout autant, alors qu'elle, se présente sous une forme différente dont chacun sait que c'est celle d'un *limaçon* ? Alors est-ce que nous ne pouvons pas au moins questionner que, si ces deux organes si manifestement *difféomorphiques*, si je puis m'exprimer ainsi, perçoivent de même « *sphériquement* », est-ce que – à prendre les choses à partir de mon *objet* dit *petit (a)* – ce n'est pas par une *conjonction nécessaire* qui enchaîne le *petit (a)* lui-même à faire « *boule* » du fait que le *petit (a)* sous d'autres

formes...

à ceci près qu'il n'en a pas de forme, mais qu'il est pensable de façon dominante, oralement ou aussi bien, si je puis dire, *chialement ...le facteur commun* du *petit (a)* c'est d'être lié *aux orifices du corps*. Et quelle est l'incidence du fait qu'œil et oreille soient orifices aussi, sur le fait que *la perception* soit pour tous deux *sphéroïdale* ? Sans le *petit (a)*, quelque chose manque à toute théorie possible d'aucune référence, d'aucune apparence d'*harmonie*,

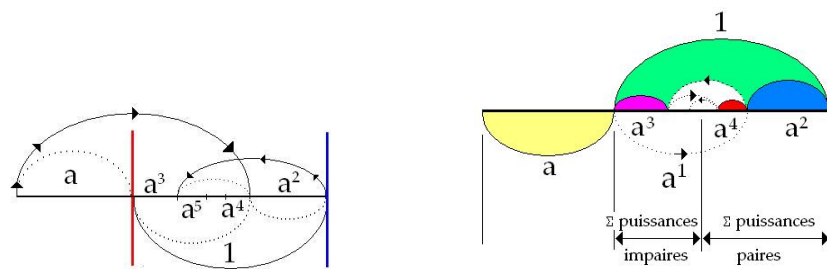
et ceci du fait que le sujet, le sujet supposé - c'est sa condition de n'être que supposable - ne connaît quelque chose, que d'être lui-même, en tant que sujet, causé par un objet qui n'est pas ce qu'il connaît, ce qu'il imagine connaître, c'est-à-dire qui n'est pas l'Autre comme tel de la connaissance, mais qui, au contraire, cet objet, l'*objet petit (a)*, le raye, cet Autre.

L'Autre est ainsi - l'Autre que j'écris avec le grand A - *l'Autre est ainsi matrice à double entrée, dont le petit (a) constitue l'une de ces entrées*, et dont l'autre... qu'allons-nous en dire ? *Est-ce l'Un du signifiant* ? Commençons d'interroger si ce n'est pas là, *pensable*. Je dirais que c'est même grâce à ça que j'ai pu un jour faire pour vous - si tant est que *certain*s de ceux qui sont ici fussent là - copuler le **1** et mon *petit (a)*, qu'à cette occasion j'avais mis au rapport de l'**1** à le supposer du *nombre d'or*¹.

Ça m'a été assez utile pour introduire ce que... ce où déjà j'étais conduit par l'expérience, à savoir qu'il s'y lit assez bien qu'entre cet **1** et ce *petit (a)*, il n'y a strictement aucun rapport rationnellement déterminable. Le *nombre d'or*, vous vous en souvenez, c'est : $1/a = 1 + a$. Il en résulte que jamais nulle proportion n'est saisissable entre le **1** et le *(a)*, que la différence du **1** au *(a)* sera toujours un *(a²)* et ainsi de suite indéfiniment, une puissance de *(a)*.

¹ Cf. Séminaire 1968-69 : *D'un Autre à l'autre*, Seuil, Paris, 2006, spécialement les séances des 22-01 et 29-01 1969 et séminaire 1969-70 : *La psychanalyse*

à l'envers, séance du 10-06-1970.



C'est-à-dire qu'il n'y a jamais aucune raison que le recouvrement de l'un par l'autre se termine. Que la différence sera aussi petite qu'on peut la *figurer*, qu'il y a même une limite mais qu'à l'intérieur de cette limite, il n'y aura jamais conjonction, copulation quelconque du **1** au (**a**). Est-ce à dire que l'*Un de sens* - car c'est cela que le *Symbolique* a pour effet de *signifiant* - est quelque chose qui ait affaire à ce que j'ai appelé *la matrice, la matrice* qui raye l'Autre de sa double entrée.

L'*Un de sens* ne se confond pas avec ce qui fait l'**1** de signifiant. L'*Un de sens* c'est l'être, l'être spécifié de l'*inconscient*, en tant qu'il *ex-siste*, qu'il *ex-siste* du moins au corps. Car s'il y a une chose frappante, c'est qu'il *ex-siste* dans le dis-cord. Il n'y a rien dans l'*inconscient* - s'il est fait tel que je vous l'énonce - qui au corps fasse *accord*: l'*inconscient* est *discordant*. L'*inconscient* est ce qui, de parler, détermine le sujet en tant qu'*être*, mais *être* à rayer de cette métonymie, dont « je » supporte le désir, en tant qu'à tout jamais impossible à dire comme tel.

Si je dis que le *petit(a)* est ce qui *cause* le désir, ça veut dire qu'il n'en est pas l'objet. Il n'en est pas le complément direct ni indirect, mais seulement cette cause qui - pour jouer du mot comme je l'ai fait dans mon premier Discours de Rome - *cette cause qui cause toujours*. Le sujet est causé d'un *objet* qui n'est notable que d'une écriture, et c'est bien en cela qu'un pas est fait dans la théorie. L'irréductible de ceci - qui n'est pas effet de langage, car l'effet du langage, c'est le *παθείν* [*pathein*] - c'est la passion du corps. Mais, du langage, est *inscriptible*, est notable - en tant que le langage n'a pas d'effet - cette abstraction radicale qui est l'*objet*, l'*objet* que je désigne, que j'écris de la figure d'écriture (**a**), et dont rien n'est pensable, à ceci près que tout ce qui est sujet - sujet de pensée qu'on imagine être « *Être* » - en est déterminé.

L'*Un de sens* est si peu ici intéressé que ce qu'il est, ce qu'il est comme effet, *effet de l'1 de*

signifiant, nous le savons

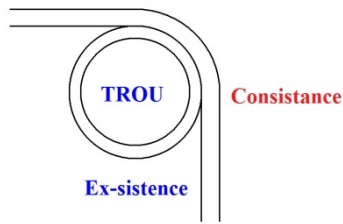
et j'y insiste : l'1 de signifiant n'opère, n'opère en fait qu'à pouvoir être employé à désigner n'importe quel signifié.

L'Imaginaire et le Réel, ils sont ici noués à cet 1 de signifiant. Qu'en dirons-nous sinon que pour ce qui est de leur qualité - ce que Charles Sanders PEIRCE appelle la firstness - de ce qui les répartit comme qualités différentes ? Où mettre par exemple, comment répartir entre eux à cette occasion quelque chose comme « la vie » ou bien « la mort » ? Qui sait où les situer, puisque aussi bien le signifiant, l'1 de signifiant comme tel, cause aussi bien sur l'un ou l'autre des versants ? On aurait tort de croire que des deux, du Réel et de l'Imaginaire, ce soit l'Imaginaire qui soit mortel et ce soit le Réel qui soit le vivant. Seul l'ordinaire de l'usage d'un signifiant peut être dit arbitraire, mais d'où provient cet arbitraire, si ce n'est d'un discours structuré !

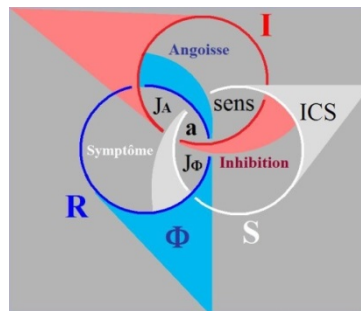
Évoquerais-je ici le titre d'une revue qu'à Vincennes, sous mes auspices, on voit paraître : Ornicar. N'est-ce pas un exemple de ce que le signifiant détermine ? Ici il le fait d'être agrammatical, ceci de ne figurer qu'une catégorie de la grammaire. Mais c'est en cela, qu'il démontre la configuration comme telle, celle si je puis dire, qui au regard d'ICARE ne fait que l'orner. Le langage n'est qu'une ornure. Il n'y a que rhétorique, comme dans la Règle X, DESCARTES le souligne².

La dialectique n'est supposable que de l'usage de ce qu'il égare vers un ordinaire mathématiquement ordonné, c'est-à-dire vers un discours, celui qui associe, non pas le phonème, même à entendre au sens large, mais le sujet déterminé par l'Être, c'est-à-dire par le désir. Qu'est-ce que l'affect d'ex-sister, à partir de mes termes ? C'est à voir, au regard de ce champ où je situe ici l'inconscient, c'est-à-dire cet intervalle entre, si je puis dire, deux consistances, celle qui ici se note d'un bord que j'ai fait bord de page et celle qui ici se boucle, se boucle : se boucler impliquant le trou sans lequel il n'y a pas de nœud.

² Cf. note 6 p.45 in René Descartes : Œuvres et lettres, Paris, 1953, Gallimard - La Pléiade, Règles pour la direction de l'esprit, Règle X, p.70.



Qu'est-ce que l'affect d'*ex-sister* ? Il concerne ce champ où non pas n'importe quoi se dit, mais où déjà *la trame, le treillis* de ce que tout à l'heure, je vous désignais d'une *double entrée*, du *croisement* du *petit(a)* avec ce qui du signifiant se définit comme être. *Qu'est-ce qui de cet inconscient fait ex-sistence* ? *C'est ce que j'ai ici figuré* : et ce que je souligne à l'instant même du support du *symptôme*.



Qu'est-ce que dire le *symptôme* ? C'est *la fonction du symptôme*, fonction à entendre comme le ferait la formulation mathématique : $f(x)$. Qu'est-ce que ce x ? *C'est ce qui de l'inconscient peut se traduire par une lettre, en tant que seulement dans la lettre, l'identité de soi à soi est isolée de toute qualité.*

De l'inconscient, tout **1** - *en tant qu'il sustente le signifiant en quoi l'inconscient consiste* - tout **1** est susceptible de s'écrire d'une *lettre*. Sans doute, y faudrait-il convention. Mais l'étrange, c'est que c'est cela que le *symptôme* opère sauvagement : *ce qui ne cesse pas de s'écrire dans le symptôme relève de là.*

Il y a pas longtemps que quelqu'un...

quelqu'un que j'écoute dans ma *pratique*, et rien de ce que je vous dis ne vient d'ailleurs que de cette *pratique*, c'est bien ce qui en fait la difficulté, la difficulté que j'ai à vous la transmettre

...quelqu'un, au regard du *symptôme*, m'a articulé ce quelque chose qui le rapprocherait des

points de suspension.

L'important est la référence à l'écriture. La *répétition* du *symptôme* est ce quelque chose dont je viens de dire que - *sauvagement* - c'est *écriture*. Ceci pour ce qu'il en est du *symptôme* tel qu'il se présente dans ma pratique. Que le terme soit sorti d'ailleurs

- à savoir du *symptôme* tel que MARX l'a défini dans le social - n'ôte rien au bien fondé de son emploi dans, si je puis dire, le privé. Que le *symptôme* dans le social se définisse de la *déraison* n'empêche pas que, pour ce qui est de chacun, il se signale de toutes sortes de rationalisations. Toute rationalisation est un fait de *rationnel particulier*, c'est-à-dire non pas d'exception, mais de n'importe qui. Il faut que n'importe qui puisse faire exception pour que la fonction de l'exception devienne modèle. Mais la réciproque n'est pas vraie : il ne faut pas que l'exception traîne chez n'importe qui pour constituer, de ce fait, modèle. Ceci est l'état ordinaire.

N'importe qui atteint *la fonction d'exception* qu'a le père. On sait avec quel résultat, celui de sa *Verwerfung*, ou de son rejet, dans la plupart des cas, par *la filiation* que le père engendre avec les résultats psychotiques que j'ai dénoncés. Un père n'a droit au respect, sinon à l'amour, que si le dit, le dit amour, le dit respect, est - vous n'allez pas en croire vos oreilles -père-versement orienté, c'est-à-dire fait d'une femme, *objet(a)* qui cause son désir. Mais ce que cette femme en « *(a)*-cueille », si je puis m'exprimer ainsi, n'a rien à voir dans la question !

Ce dont elle s'occupe, c'est d'autres *objets(a)* qui sont les enfants auprès de qui le père pourtant intervient, exceptionnellement, dans le bon cas, pour maintenir dans la répression, dans le juste *mi-Dieu* si vous me permettez, la version qui lui est propre de sa *père-version*, seule garantie de sa fonction de père, laquelle est la *fonction*, la *fonction de symptôme* telle que je l'ai écrite là, *comme telle*. Pour cela, il y suffit qu'il soit un modèle de *la fonction*.

Voilà ce que doit être le père, en tant qu'il ne peut être qu'exception. Il ne peut être modèle de la fonction qu'à en réaliser le type. Peu importe qu'il ait des symptômes, s'il y ajoute celui de la *père-version* paternelle, c'est-à-dire que la cause en soit une femme qu'il se soit acquise pour lui faire des enfants, et que de ceux-ci, qu'il le veuille ou pas, il prenne soin paternel.

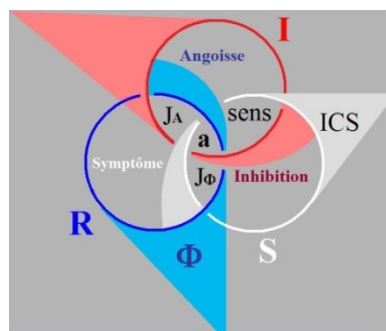
La normalité n'est pas la vertu paternelle par excellence, mais seulement le juste *mi-Dieu* dit à

l'instant, soit le juste non-dire. Naturellement à condition qu'il ne soit pas *cousu de fil blanc*, ce non-dire, c'est-à-dire qu'on ne voie pas tout de suite - enfin ! - de quoi il s'agit dans ce qu'il ne dit pas. C'est rare ! C'est rare et ça renouvellera le sujet de dire que c'est rare qu'il réussisse ce juste *mi-Dieu* ! Ça renouvellera le sujet quand j'aurai le temps de vous le reprendre. Je vous l'ai dit simplement au passage dans un article sur le SCHREBER. Là rien de pire, rien de pire que le père qui profère la loi sur tout : pas de père éducateur surtout, mais plutôt en retrait sur tous les magistères.

Je vais terminer comme ça à vous parler d'une femme. Et ben, c'est bien là tout ce que je faisais pour éviter de parler d'une femme, puisque je vous dis que *La femme*, ça existe pas. Naturellement tous les journalistes ont dit que j'avais dit que *les femmes*, ça n'existait pas ! Il y a des choses comme ça, qu'on ne peut pas - *le donne [en italien]* - qui se sont exprimées, enfin des choses comme ça qu'on... Ils sont même pas, même pas capables de s'apercevoir que dire *La femme*, c'est pas la même chose que de dire *les femmes*, alors que *La femme*, ils en ont *plein la bouche* tout le temps, enfin, n'est-ce pas !

La femme, c'est évidemment quelque chose de parfaitement, parfaitement dessinable. « *Toutes les femmes* » comme on dit, mais moi je dis aussi que les femmes sont *pas-toutes* alors, ça fait un peu objection, n'est-ce pas ! Mais *La femme* c'est... disons que c'est « *Toutes les femmes* », mais alors c'est *un ensemble vide*, parce que cette *théorie des ensembles*, c'est quand même quelque chose qui permet de mettre un peu de sérieux dans l'usage du terme « *tout* ». Ouais...

Une femme d'abord, la question ne se pose que pour l'autre, *les femmes* de celui pour lequel il y a un ensemble définissable, définissable par quelque chose qui est là inscrit au tableau.



C'est pas J_{\square} , c'est pas la jouissance phallique, c'est ça : Φ , Φ ça *ex-siste*, Φ c'est *le phallus*. Qu'est-ce que c'est que *le phallus* ? Ben, comme bien sûr on traîne, enfin c'est moi qui traîne bien sûr, qui traîne tout ce charroi. Alors je vous le dirai pas aujourd'hui ce que c'est que *le phallus*. Enfin quand même, vous pouvez en avoir tout de même un petit soupçon : si la jouissance phallique est là, c'est que *le phallus*, ça doit être autre chose, hein ? Alors, *le phallus*, qu'est-ce que c'est ? Enfin, je vous pose la question parce que je peux pas m'étendre comme ça aujourd'hui trop longtemps. C'est la jouissance sans l'organe, ou l'organe sans la jouissance ? Enfin, c'est sous cette forme que je vous interroge pour donner sens - hélas ! - à cette figure. Enfin, je vais sauter le pas. Pour qui est encombré du *phallus* : « *qu'est-ce qu'une femme ?* » C'est *un symptôme* ! C'est *un symptôme* et ça se voit, ça se voit de la structure là que je suis en train de vous expliquer.

Il est clair que s'il y a pas de *Jouissance de l'Autre comme telle*, c'est-à-dire s'il y a pas de *garant* rencontrable dans la jouissance du corps de l'Autre qui fasse que *jouir de l'Autre* comme tel ça existe - ici, est l'exemple le plus manifeste du *trou*, de ce qui ne se supporte que de l'*objet(a)* lui-même, mais par *maldonne*, par confusion.

Une femme, pas plus que l'homme, n'est un *objet(a)*. Elle a les siens, que j'ai dit tout à l'heure, dont elle s'occupe, ça n'a rien à faire avec celui dont elle se supporte dans un désir quelconque. La faire *symptôme*, cette « *une femme* » c'est tout de même la situer, dans cette articulation, au point où *la jouissance phallique*, comme telle, est aussi bien son affaire.

Contrairement à ce qui se raconte, la femme n'a à subir ni plus ni moins de castration que l'homme. Elle est, au regard de ce dont il s'agit dans sa fonction de *symptôme*, tout à fait au même point que son homme.

Il y a simplement à dire comment pour elle, cette *ex-sistence*, cette *ex-sistence* de *Réel* qu'est mon *phallus* de tout à l'heure, *celui sur lequel je vous ai laissés la langue pendante*, il s'agit de savoir ce qui y correspond pour elle. Vous imaginez pas que c'est le petit machin là dont parle FREUD, ça n'a rien à faire avec ça !

Ces « *points de suspension* » du *symptôme* sont en fait des points - si je puis dire - interrogatifs dans le non-rapport. Je voudrais quand même - pour frayer ce que là j'introduis - vous

montrer par quel biais ça se justifie, cette définition du *symptôme*. *Ce qu'il y a de frappant dans le symptôme* - dans ce quelque chose qui, comme là, se bécote avec l'inconscient - *c'est qu'on y croit*. Il y a si peu de *rappports sexuels* que je vous recommande pour ça la lecture d'une chose qui est un très beau roman : *Ondine*³. *Ondine* manifeste ce dont il s'agit : une femme dans la vie de l'homme, c'est quelque chose à quoi il croit, il croit qu'il y en a une, quelque fois deux, ou trois - et c'est bien là d'ailleurs que c'est intéressant c'est qu'il peut pas croire qu'à une - il croit qu'il y a une *espèce*, dans le genre des *sylphes* ou des *ondins*.

Qu'est-ce que c'est que croire aux *sylphes* ou aux *ondins* ? Je vous fais remarquer qu'on dit « croire à » dans ce cas-là. Et même que la langue française y ajoute ce renforcement de ce que ce n'est pas « croire à », mais « croire y », croire là. « Y croire » qu'est-ce que ça veut dire ? « Y croire » ça ne veut dire strictement que ceci, ça ne peut vouloir dire *sémiotiquement* que ceci : croire à des êtres en tant qu'ils peuvent *dire quelque chose*.

Je vous demande de me trouver *une exception* à cette *définition*. Si ce sont des êtres qui ne peuvent rien dire...

dire à proprement parler, c'est-à-dire énoncer ce qui se distingue comme vérité ou comme mensonge

...ça ne peut rien vouloir *dire*. Seulement, ça, la fragilité de cet « Y croire », à quoi manifestement réduit le fait

du non-rapport tellement tangiblement recoupable de partout - je veux dire qu'il se recoupe - il y a pas de doute : quiconque vient nous présenter *un symptôme y croit*. Qu'est-ce que ça veut *dire* ? S'il nous demande notre aide, notre secours, c'est parce qu'il croit que le symptôme, il est capable de *dire* quelque chose, qu'il faut seulement le déchiffrer.

C'est de même pour ce qu'il en est *d'une femme*, à ceci près - ce qui arrive, mais ce qui n'est pas évident - c'est qu'on croit qu'elle *dit* effectivement *quelque chose*. C'est là que joue le bouchon : pour y croire, on la croit, on croit ce qu'elle dit. C'est ce qui s'appelle *l'amour*. Et c'est en quoi c'est un sentiment que j'ai qualifié à l'occasion de comique. C'est le comique bien connu, le comique de la psychose, c'est pour ça qu'on nous dit couramment

³ Friedrich Heinrich Karl La Motte-Fouqué : *Ondine*, éd. José Corti, 1989. Jean Giraudoux : *Ondine*, LGF Livre de Poche, 1975.

que l'amour est une *folie*.

La différence est pourtant manifeste entre « *Y croire* », au symptôme, ou « *le croire* ». C'est ce qui fait la différence entre *la névrose* et la *psychose*. Dans la *psychose*, les voix - tout est là ! - ils y croient. Non seulement, ils *y croient*, mais ils *les* croient. Or tout est là, dans cette limite. La croire est un état - Dieu merci ! -répandu, parce que quand même *ça fait de la compagnie* ! On n'est plus tout seul.

Et c'est en ça que l'amour est précieux, rarement réalisé – comme chacun sait : ne durant qu'un temps... et quand même fait de ceci que c'est essentiellement de cette fracture du mur où on ne peut se faire qu'une bosse au front, qu'il s'agit. S'il n'y a pas de rapport sexuel, il est certain que l'amour, l'amour se classifie selon un certain nombre de cas que STENDHAL a fort bien effeuillés :

- il y a *l'amour-estime*, c'est ça enfin,
- c'est pas du tout *incompatible* avec *l'amour-passion*,
- ni non plus avec *l'amour-goût*,
- mais quand même *l'amour majeur*, c'est celui qui est fondé sur ceci : c'est qu'on *la croit*, qu'on *la croit* parce qu'on a jamais eu de preuve qu'elle ne soit pas absolument authentique.

Mais ce *la croire* est tout de même ce quelque chose sur quoi on s'aveugle totalement, qui sert de bouchon, si je puis dire - c'est ce que j'ai déjà dit - à *y croire*, qui est une chose qui peut être très sérieusement *mise en question*. Car *croire qu'il y en a une*, Dieu sait où ça vous entraîne, ça vous entraîne jusqu'à *croire* qu'il y a « *La* », « *La* » qui est tout à fait une croyance fallacieuse.

Personne ne dit *Le sylphe*, ou *L'ondine*, il y a *une ondine*, ou *un sylphe*, il y a un esprit, il y a des esprits pour certains. Mais tout ça ne fait jamais qu'un pluriel. Il s'agit de savoir quel le sens, quel sens a d'y croire et s'il n'y a pas quelque chose de tout à fait nécessité dans le fait que, pour *y croire*, il y a pas meilleur moyen que de *la croire*.

Voilà ! Il est deux heures moins dix.

J'ai introduit aujourd'hui quelque chose, j'ai introduit quelque chose que je crois pouvoir, pouvoir vous servir, parce que l'histoire des *points de suspension* de tout à l'heure, c'était quelqu'un qui m'a sorti ça à propos d'une connexion - n'est-ce pas ! - avec ce qu'il en est des femmes. Et - mon Dieu ! - ça colle si bien dans la pratique de dire *qu'une femme c'est un symptôme*, que comme jamais personne ne l'avait fait jusqu'à présent, j'ai cru devoir le faire.